

不登校児童生徒が期待する援助行動

What Kind of Supportive Activities Do School Refusers Expect?

笠井 孝久*

Takahisa KASAI

不登校児童生徒の不登校の状態やそのきっかけは様々であり、彼らに対する援助的関わりには、個別的アプローチが必要となる。児童生徒個々の発達状況や置かれている環境によって、乗り越えるべき課題が異なると考えられているためである。

不登校を理解する視点の1つとして、発達課題の視点がある。例えば、中学生には、新しい価値基準の獲得といった、その時期特有の課題があり(笠井, 2000他), それの不登校のきっかけや原因になったりするという視点である。確かに、それぞれの発達課題は容易に達成できるものではなく、課題への取り組みの困難さや達成の失敗をきっかけに不登校になることも少なくない。不登校児を理解・援助する際に、発達課題の視点は、非常に有用である。

ところが筆者が出会った不登校児の中には、実年齢以前の発達課題でつまずき、その課題は達成されないままの状態になっている子どもも少なくない。既に中学生の年齢になっているのに、対人関係の技術が実年齢の子ども達に比べ、著しく未熟だったり、興味・関心が小学校低学年程度の生徒は、とても同年代の仲間集団には適応できないだろう。ある時期の発達課題の未達成が、後の発達段階で問題を生じさせるものと考えられる。故に、実年齢の発達課題についての視点、すなわち横断的に発達をとらえる視点だけではなく、それまでの発達課題で達成できていないものは何か、不登校になったために本来なら体験すべき教育経験や対人関係が限定されてしまい、本人の実年齢に即した発達が阻害されてしまったのではないかを考慮して不登校児に対する理解・援助を行う必要がある。不登校により阻害された経験が、学校復帰への妨げになることは、不登校による学業の遅れを考えると容易に理解できる。不登校児童生徒が、いざ学校へ復帰しようとしたときに、学業の遅れが気になって、登校行動が妨げられることも少なくない。

近年、不登校児童生徒への援助的関わりとして、グループ体験や野外体験活動が多く行われている(国立オリンピック記念青少年総合センター1998, 笠井, 1999)。これらの活動は、集団生活の中で傷ついた不登校児童生徒に、緩やかなペースの小集団活動を通して、自己信頼感や自信、集団で活動する楽しさ等を取り戻させる機能だけでなく、不登校をしていたがために阻害された経験や対人関係を補う機能も有している。この経験補足的な視点は、これまであまり着目されていなかったように思われるが、不登校児童生徒が再び学校へ復帰する場合に、同学年の集団への適応をより円滑に行うためには、非常に有効な関わりであると考えられる。そのような関わりを行うためには、まず、児童生徒が不登校という経験から、どのような影響を受けているかを明らかにする必要がある。

そこで本研究では、不登校児童生徒が担任や友人に期待する関わりについて、現在の年齢という視点に加え、不登校になった時期や不登校の長さ等を分析の観点に加えて検討する。それによって、不登校をしている間に阻害された経験や、反対に不登校だからこその他の児童生徒が経験することができない経験を検討することが、現時点での不登校児に対する適切な援助のあり方についての有用な視点となる可能性について検討する。

* 教育実践総合センター

1 調査方法

(1) 調査対象

千葉県内の不登校児童生徒261名（うち適応指導教室へ通っている児童生徒：194名、不登校児を対象としたキャンプに参加している児童生徒：67名）。

(2) 調査内容

調査は質問紙法によることとした。質問紙は、県教育委員会、大学教員、現職教員（委託研究生）からなるワーキンググループでの話し合いにより作成された。被験者の学年、性別、不登校になった時期、保健室登校の有無、現在の登校状況、担任／友だちへの期待、適応指導教室／不登校児キャンプの効果、日常生活等から構成されている。

本研究で取り上げる調査内容は以下の通りである。

1) 担任への期待

学校において不登校児童生徒への関わりを中心となるのは担任教師である。しかし、担任教師が不登校児へに関わろうと努力しても、子どもの側がそれを拒否し、担任と面会しない、問いかけや関わりに対しても反応しない等のことも少なくない。

不登校児童生徒が担任の教師の働きかけをどのようにとらえているかを明らかにするために「家庭訪問」、「電話連絡」、「配布物を届ける」の3点について、担任にしてほしいと思う程度を「そう思う」、「少しそう思う」、「そう思わない」の3段階評定で尋ねた。

2) 友だちへの期待

担任と並んで、不登校の子どもたちと接触をもち、また社会との接点や学校復帰へのエージェントとなる可能性が高いのが友人の存在である。不登校にはなっていない、放課後は友人と遊んだり、電話連絡をとっている子どもも多い。教師という学校側の存在とは異なり、自分と同じ立場である友人に対しては、担任とは違う関わりを期待するのではないだろうか。友人の関わりに対しても「家庭訪問」、「電話連絡」、「配布物を届ける」の3点について、「そう思う」、「少しそう思う」、「そう思わない」の3段階評定で尋ねた。

3) 不登校になったきっかけ

不登校になったきっかけは、各自によって様々であろうが、不登校になった年齢によって、ある傾向を示す可能性がある。ここでは「クラス」、「先生」、「友達」、「勉強」、「いじめ」、「はずかしい体験」、「身体」の7項目を提示し、きっかけとして当てはまるものすべてを選択させた。

(3) 調査方法

調査は千葉県教育委員会生徒指導部生徒指導室により実施された。以下の2対象に対して、調査を依頼した。

①県内の適応指導教室に通う児童生徒：千葉県内の各地域に設置されている適応指導教室に調査の趣旨を説明し、実施を依頼した。実施方法は不登校児童生徒の状態を考慮し、各適応指導教室にまかされ、集団実施や自宅に持ち帰り、翌日、調査用紙を提出する等の方法がとられた。調査用紙は、適応指導教室の担当者が回収し、一括して生徒指導室に返送された。

②不登校児を対象としたキャンプに参加している児童生徒：千葉県教育委員会生涯学習部社会教育課が主催する不登校児を対象としたキャンプに参加している児童生徒のそれぞれに直接、調査の趣旨を説明した文書と調査用紙、返信用封筒を郵送し、調査への協力を求めた。回答後は、県教育委員会生徒指導室に郵送するよう依頼した。回収された調査用紙は、そのまま筆者らに届けられ、筆者らが分析を行った。

(4) 調査時期

平成10年10月～12月

2 結果と考察

(1) 回収率

①適応指導教室に通う児童生徒：194名から回答があった。適応指導教室に在籍している児童生徒の66%にあたる。

②不登校児キャンプに参加している児童生徒：67名から回答があった。回収率は44%であった。

(2) 被験者の属性

表1に被験者の学年別性別人数を示す。中学生が全体の80%以上を占めており、中学生の不登校増加が問題となっている現状を反映した結果といえるであろう。

表1 性別学年別人数

	小2	小4	小5	小6	中1	中2	中3	性別計
男	2 (2.0)	2 (2.0)	7 (7.0)	5 (5.0)	18 (18.0)	32 (32.0)	34 (34.0)	100 41.7%
女	0 (0.0)	5 (3.5)	6 (4.3)	8 (5.7)	12 (8.6)	42 (30.0)	66 (47.1)	140 58.3%
学年別計	2 (0.8)	7 (2.9)	13 (5.4)	13 (5.4)	30 (12.5)	74 (30.8)	100 (41.7)	240

注：性別、学年の記入が不適切な場合は除外した

表2には、初発時期別学年別人数を示した。被験者は中学2、3年生の割合が高いが、不登校になった時期で見ると中学1年時に不登校になった生徒が最も多い(33.8%)。中学生になってから不登校になった生徒が全体の60%近くを占めている(59.6%)。

また、現在の学年と初発時期との関連から、3年未満の児童生徒が全体の80%以上を占めていることが読みとれるが、5年、6年と長い不登校の経過をたどっている児童生徒も少なからず存在している。

表2 初発時期別学年別人数

	現在の学年						初発時期別	
	小学2	小学4	小学5	小学6	中学1	中学2	中学3	合計
小学1年	1 (0.4)	1 (0.4)	2 (0.9)	1 (0.4)		2 (0.9)		7 (3.1)
小学2年		1 (0.4)		1 (0.4)		2 (0.9)	3 (1.3)	7 (3.1)
小学3年		4 (1.8)	2 (0.9)	3 (1.3)	3 (1.3)		2 (0.9)	14 (6.1)
小学4年		1 (0.4)	8 (3.5)	1 (0.4)	5 (2.2)	6 (2.6)	1 (0.4)	22 (9.6)
小学5年				2 (0.9)	7 (3.1)	6 (2.6)	6 (2.6)	21 (9.2)
小学6年				4 (1.8)	6 (2.6)	5 (2.2)	6 (2.6)	21 (9.2)
中学1年					8 (3.5)	37 (16.2)	32 (14.0)	77 (33.8)
中学2年						15 (6.6)	38 (16.7.9)	53 (23.2)
中学3年							6 (2.6)	6 (2.6)
学年別合計	1 (0.4)	7 (3.1)	12 (5.3)	12 (5.3)	29 (12.7)	73 (32.0)	94 (41.2)	228

・()内はパーセンテージ

(3) 学年と初発時期に基づいた分類

本研究では、現在の学年及び不登校を始めた時期に焦点を当てて、不登校児童生徒の担任、友人に対する期待、不登校になったきっかけの認識等の差異を検討する。対象児の学年によって、これらの認識に違いがある

可能性が高く、また同じ年齢でも不登校の経過の長い子どもと不登校になって間もない子どもとでは、その感じ方が異なるのではないかと推察されるからである。本来ならば被験者の学年と初発時期のそれぞれを独立した要因として他の変数との関連を調べるべきであるが、ここでは被験者の偏り（中学生が全体の80%以上を占める、小学生の学年ごとに人数の少なさ等）を考慮し、「小学生」、「小学初発（中学入学以前から不登校をしている生徒）」、「中学初発（中学入学後不登校になった生徒）」の3群に便宜的に分類し、他の変数との関連を調べることにする。

表3には、グループごとの性別、学年別、不登校期間別の人数を示す。各グループの特徴をまとめると、小学生群は、女子の割合がやや多く、不登校期間の平均は2.53年である。小学初発群は、男女ほぼ同数で、平均不登校期間4.15年と3群の中で最長である。中学初発群は女子の割合が高く、平均不登校期間1.93年と最も短い。

表3 各グループの属性

グループ名	小学生	小学初発	中学初発
性別 男子	14 (43.8)	30 (50.8)	51 (37.5)
性別 女子	18 (56.3)	29 (49.2)	85 (62.5)
学年 小学2	1 (3.1)		
小学4	7 (21.9)		
小学5	12 (37.5)		
小学6	12 (37.5)		
年 中学1		21 (35.6)	8 (5.8)
中学2		20 (33.9)	53 (38.7)
中学3		18 (30.5)	76 (55.5)
期 1年未満	6 (18.8)	1 (1.7)	38 (27.7)
1~2年	13 (40.6)	9 (15.3)	70 (51.1)
2~3年	6 (18.8)	14 (23.7)	29 (21.2)
3~4年	5 (15.6)	16 (27.1)	
4~5年	1 (3.1)	8 (13.6)	
間 5~6年	1 (3.1)	2 (3.4)	
6~7年	0	4 (6.8)	
7年以上	0	5 (8.5)	
平均	2.53	4.15	1.93
人数計	32	59	137

(4) 担任への期待

不登校児童生徒が、担任に対してどのような関わりを期待するかを調べた結果を表4に示す。この結果からは、家庭訪問、電話連絡等の担任と直接的に関係する関わりはあまり期待されていないが、プリントなどの配布物を届けると

・()内は列ごとのパーセンテージ

表4 担任への期待

関わりの内容	そう思う	少しそう思う	そう思わない
もっと家庭訪問してほしい	10 (4.3)	43 (18.5)	179 (77.2)
もっと電話連絡してほしい	20 (8.6)	66 (28.4)	146 (62.9)
プリントなど配布物を届けてほしい	73 (31.6)	79 (34.2)	79 (34.2)

・()内は行ごとのパーセンテージ

いった関わりをして欲しいと思う児童生徒は65%を超える（「そう思う」、「少しそう思う」と回答した数の合計）。不登校児童生徒の多くは学校との関わりを全く拒否している訳ではなく、プリントを届けるといった子どもと学校をつなげる間接的な関わりは期待していると言えるであろう。不登校はしていても、学校との関係は保っておきたいという気持ちの表れではないだろうか。

表5には、担任への期待を上記のグループ別に検討した結果を示す。家庭訪問を強く期待する（「そう思う」と回答）のは小学初発群で、小学生群では0であった。「そう思う」と「少しそう思う」の回答数を合計して比較すると、3群間に大きな差はみられない。電話連絡をしてほしいと期待するのは小学生群と中学初発群である。これらの両グループは不登校を始めてからの期間が比較的短く、担任との関係がそれほど希薄になっていないためと推測される。配布物でも、小学生群と中学初発群の期待度が高い。中学初発群の期待が高いのは、学校との関係を保っておきたいという気持ちの他に、受験などの情報を得たいという気持ちがあるのではないだろうか。

表6には、グループ別性別に担任への期待を検討した結果を示す。「そう思う」と「少しそう思う」に回答した割合を合計して考えると、「家庭訪問」に対しては、小学生群と中学初発群では、女子の方がやや期待度が高い。小学初発群では男女間にほとんど差はない。「電話連絡」に対しては、小学生群では女子のほうが期待度が

表5 グループ別担任への期待

関わりの内容		そう思う	少しそう思う	そう思わない
もっと家庭訪問してほしい	小学生	0 (0.0)	7 (23.3)	23 (76.7)
	小学初発	4 (7.1)	10 (17.9)	42 (75.0)
	中学初発	5 (3.8)	22 (16.5)	06 (79.7)
	合計	9 (4.1)	39 (17.8)	171 (78.1)
もっと電話連絡してほしい	小学生	1 (3.3)	11 (36.7)	18 (60.0)
	小学初発	5 (8.8)	12 (21.1)	40 (70.2)
	中学初発	11 (8.3)	39 (29.5)	82 (62.1)
	合計	17 (7.8)	62 (28.3)	140 (63.9)
プリントなど配布物を届けてほしい	小学生	9 (29.0)	11 (35.5)	11 (35.5)
	小学初発	11 (19.6)	22 (39.3)	23 (41.1)
	中学初発	46 (34.8)	43 (32.6)	43 (32.6)
	合計	66 (30.1)	76 (34.7)	77 (35.2)

・()内は行ごとのパーセンテージ

表6 グループ別性別担任への期待

関わりの内容			そう思う	少しそう思う	そう思わない
もっと家庭訪問してほしい	小学生	男子	0	2 (16.7)	10 (83.3)
		女子	0	5 (27.8)	13 (72.2)
	小学初発	男子	1 (3.7)	6 (22.2)	20 (74.1)
		女子	3 (10.3)	4 (13.8)	22 (75.9)
	中学初発	男子	2 (4.1)	6 (12.2)	41 (83.7)
		女子	3 (3.6)	16 (19.3)	64 (77.1)
もっと電話連絡してほしい	小学生	男子	0	3 (25.0)	9 (75.0)
		女子	1 (5.6)	8 (44.4)	9 (50.0)
	小学初発	男子	3 (10.7)	5 (17.9)	20 (71.4)
		女子	2 (6.9)	7 (24.1)	20 (69.0)
	中学初発	男子	3 (6.1)	14 (28.6)	32 (65.3)
		女子	8 (9.8)	25 (30.5)	49 (59.8)
プリントなど配布物を届けてほしい	小学生	男子	2 (15.4)	5 (38.5)	6 (46.2)
		女子	7 (38.9)	6 (33.3)	5 (27.8)
	小学初発	男子	4 (14.8)	9 (33.3)	14 (51.9)
		女子	7 (24.1)	13 (44.8)	9 (31.0)
	中学初発	男子	18 (36.7)	10 (20.4)	21 (42.9)
		女子	28 (34.1)	32 (39.0)	32 (39.0)

・()内は行ごとのパーセンテージ

高く、小学初発群と中学初発群では差は見られない。「配布物」ではいずれの群でも女子の方が男子よりも期待度が高い。

概して男子のほうが、家庭訪問、電話連絡などの担任と直接的にコンタクトをとる関わりに対して、そうして欲しいと思う傾向が強い、あるいは、担任との関わりに許容的と言える。女子はむしろ、配布物を届けるといったような間接的な関わりを期待する傾向にあると言えるだろう。グループによって男女差に相違があり、両要因が相互作用的に関連していることが推察される。

(5) 友だちへの期待

担任への期待と類似の内容について、友だちへの期待を尋ねた結果を表7に示す。「家庭への訪問」では、担任よりも友だちに対する期待のほうが大きい。反対に「配布物を届ける」に対する期待は担任よりも少ない。

表7 友だちへの期待

関わりの内容	そう思う	少しそう思う	そう思わない
もっと自分の家に来てほしい	25 (11.0)	61 (26.8)	142 (62.3)
もっと電話連絡してほしい	33 (14.3)	62 (27.0)	135 (58.7)
プリントなど配布物を届けてほしい	45 (19.7)	63 (27.5)	121 (52.8)

・()内は行ごとのパーセンテージ

表8 グループ別友だちへの期待

関わりの内容		そう思う	少しそう思う	そう思わない
もっと家に来てほしい	小学生	3 (9.7)	12 (38.7)	16 (51.6)
	小学初発	6 (11.1)	21 (38.9)	27 (50.0)
	中学初発	13 (10.0)	27 (20.8)	90 (69.2)
	合計	22 (10.2)	60 (27.9)	133 (61.9)
もっと電話連絡してほしい	小学生	3 (9.7)	11 (35.5)	17 (54.8)
	小学初発	10 (17.5)	19 (33.3)	28 (49.1)
	中学初発	17 (13.2)	29 (22.5)	83 (64.3)
	合計	30 (13.8)	59 (27.2)	128 (59.0)
プリントなど配布物を届けてほしい	小学生	8 (25.8)	9 (29.0)	14 (45.2)
	小学初発	8 (14.5)	20 (36.4)	27 (49.1)
	中学初発	25 (19.2)	32 (24.6)	73 (56.2)
	合計	41 (19.0)	61 (28.2)	114 (52.8)

・()内は行ごとのパーセンテージ

友だちには、プリントなどを届けるといった学校と関連した関わりではなく、純粋に遊びに来て欲しいといった関わりを期待しているのかもしれない。

表8には、友だちへの期待をグループ別に検討した結果を示す。家庭への訪問では小学生群、小学初発群の期待度が高く、中学初発群は期待度はそれほど高くない。同じ中学生でも、小学校から不登校になっている生徒と中学から不登校になった生徒とでは、「そう思わない」の回答率で比較すると20%近い差があり興味深い。不登校になった時点での友人関係、すなわち小学生期までの友人関係と中学生になってからの友人関係のあり方が関連しているであろう。すなわち、小学初発群（小学生時代に不登校になっている中学生）は、一緒に同じ時間や空間を過ごすことが中心の小学生期の友人関係が持続しているので、家に来てもらったり、電話をしてもらうことを期待する傾向があるのではないか。

参考までに、友だちへの期待について、適応指導教室に通学している児童生徒と、キャンプに参加している児童生徒との結果を比較した(表9)。キャンプに参加している児童生徒は、そのほとんどが普段は家にいることが多く、友人と関わる機会が少ない。そのような現在の友人関係のあり方の違いが、友人への期待にどのように関連しているだろうか。大きな違いは、「家庭への訪問」に対する小学初発群の結果である。この群では、不登校児を対象としたキャンプに参加している児童生徒の友人への期待度がとても大きい。「電話連絡」についても、同様の傾向がうかがえる。

表9 グループ別通所機関別友だちへの期待

関わりの内容		そう思う	少しそう思う	そう思わない	
もっと自分の家に来てほしい	小学生	適応	3 (15.8)	8 (42.1)	8 (42.1)
		キャンプ	0	4 (33.3)	8 (44.4)
	小学初発	適応	2 (5.4)	12 (32.4)	23 (62.2)
		キャンプ	4 (23.5)	9 (52.9)	4 (23.5)
	中学初発	適応	12 (9.9)	25 (20.7)	84 (69.4)
		キャンプ	1 (11.1)	2 (22.2)	6 (66.7)
もっと電話連絡してほしい	小学生	適応	1 (5.3)	8 (42.1)	10 (52.6)
		キャンプ	2 (16.7)	3 (25.0)	7 (58.3)
	小学初発	適応	6 (15.4)	13 (33.3)	20 (51.3)
		キャンプ	4 (22.2)	6 (33.3)	8 (44.4)
	中学初発	適応	15 (12.5)	27 (22.5)	78 (65.0)
		キャンプ	2 (22.2)	2 (22.2)	5 (55.6)
プリントなど配布物を届けてほしい	小学生	適応	6 (31.6)	4 (21.1)	9 (47.4)
		キャンプ	2 (16.7)	5 (41.7)	5 (41.7)
	小学初発	適応	4 (10.8)	15 (40.5)	18 (48.6)
		キャンプ	4 (22.2)	5 (27.8)	9 (50.0)
	中学初発	適応	23 (19.0)	29 (24.0)	69 (57.0)
		キャンプ	2 (22.2)	3 (33.3)	4 (44.4)

・()内は行ごとのパーセンテージ

不登校児童生徒が期待する援助行動

キャンプに参加している児童生徒の多くは、地域の適応指導教室や相談室等には通っておらず、キャンプを除いては他の子どもたちと接する機会がそれほど多くない。彼等は自分から積極的に友だちを求めて、適応指導教室のような機関に通うほどのエネルギーはないが、友だちが家に来てくれたり、電話をしてくれることは期待しているようである。逆に言えば、適応指導教室などで普段から同年代、あるいは他の年代の子どもたちと接する機会のある子どもたちは、そこでの関わりで、ある程度の満足を得ているのかもしれない。現在のその子どもの友人関係のあり方によって、友人にどのように関わって欲しいかという期待が異なる可能性が示唆されたと言えるだろう。

さらに、友だちへの期待をグループ別性別で検討した結果を表10に示す。「家庭への訪問」に対しては、中学生で男子のほうが女子よりも、そのような関わりをして欲しいと思っている者が多い（「そう思う」と「少しそう思う」の合計）。「配布物」についての中学初発群の期待度も同様の傾向を示している。ところが「電話連絡」になると、小学初発群で女子の方が電話連絡を期待する傾向がある。「配布物」についても、小学初発群では女子のほうが期待度が高い。

表10 グループ別性別友だちへの期待

関わりの内容			そう思う	少しそう思う	そう思わない
もっと自分の家に来てほしい	小学生	男子	0	6 (46.2)	7 (53.1)
		女子	3 (16.7)	6 (33.3)	9 (50.0)
	小学初発	男子	1 (3.8)	13 (50.0)	12 (46.2)
		女子	5 (17.9)	8 (28.6)	15 (53.6)
	中学初発	男子	6 (12.8)	13 (27.7)	28 (59.6)
		女子	7 (8.4)	14 (16.9)	62 (74.7)
もっと電話連絡してほしい	小学生	男子	2 (15.4)	4 (30.8)	7 (53.8)
		女子	1 (5.6)	7 (38.9)	10 (55.6)
	小学初発	男子	2 (6.9)	11 (37.9)	16 (55.2)
		女子	8 (28.6)	8 (28.6)	12 (42.9)
	中学初発	男子	7 (14.9)	11 (23.4)	29 (61.7)
		女子	10 (12.2)	18 (22.0)	54 (65.9)
プリントなど配布物を届けてほしい	小学生	男子	2 (15.4)	5 (38.5)	6 (46.2)
		女子	6 (33.3)	4 (22.2)	8 (44.4)
	小学初発	男子	2 (7.7)	9 (34.6)	15 (57.7)
		女子	6 (20.7)	11 (37.9)	12 (41.4)
	中学初発	男子	11 (23.4)	9 (19.1)	27 (57.4)
		女子	14 (16.9)	23 (27.7)	46 (69.7)

・()内は行ごとのパーセンテージ

同じ中学生の不登校児でも、性別や何時から不登校状態にあるか等の要因によって、その期待する内容は異なっており、不登校児に対してよく利用される“友だちに迎えにいらおう”、“プリントを届けてもらおう”等の関わりの方も、各人によって、そのような関わり方の期待や効果が異なることを考えて実施する必要があるだろう。

(6) 不登校になったきっかけ

表11には不登校になったきっかけを尋ねた結果を示した。全体で見ると、選択率の最も高かったのは「友だ

表11 全体およびグループ別不登校になったきっかけの選択数

きっかけの内容	全体	小学生	小学初発	中学初発
クラス	76 (31.9)	6 (18.8)	13 (22.0)	54 (39.4)
先生	57 (23.9)	12 (37.5)	14 (23.7)	28 (20.4)
友だち	93 (39.1)	9 (28.1)	20 (33.9)	59 (43.1)
勉強	50 (21.0)	9 (28.1)	13 (22.0)	26 (19.0)
いじめ	65 (27.3)	7 (21.9)	15 (25.4)	40 (29.2)
恥ずかしい体験	19 (8.0)	4 (12.5)	5 (8.5)	10 (7.3)
身体	30 (12.6)	4 (12.5)	9 (15.3)	17 (12.4)
計	390	32 (14.0)	59 (25.9)	137 (60.1)

・()内は行ごとのパーセンテージ

ち(39.1%)」で、以下「クラス(31.9)」、「いじめ(27.3)」と続く。全選択数が390で、一人当たり、平均1.6の不登校のきっかけを選択している。

グループ別に検討すると、小学生群で、最も被選択率の高かったきっかけは「先生(37.5)」,次いで「友だち(28.1)」、「勉強(28.1)」であった。小学初発群では「友だち(33.9)」、「いじめ(25.4)」、「先生(23.7)」,中学初発群では「友だち(43.1)」、「クラス(39.4)」、「いじめ(29.2)」という順序で選択率が高い。小学校時代に不登校になったグループ(小学生群,小学初発群)で「先生」の選択率が高いのは興味深い結果である。小学校は学級担任制のため、「担任と合わない」と、その子どもはつらい思いをする場合があると言われている。子どもが「先生」をきっかけにあげる理由が、必ずしも事実とは限らず、むしろ子どもたちの思い込みや合理化の場合もかもしれないが、小学校時代の不登校には、教師の影響が非常に大きいことが推察される。「友だち」、「いじめ」、「クラス」は、どの群でも選択率が高く、いずれも小学生群→小学初発群→中学初発群と選択率が高くなる。反対に「勉強」は小学生群で選択率が高く、小学初発群,中学初発群と選択率が下がっていく。「勉強」をきっかけとして選択するのは、学習内容が難しくなる中学生になってからではないかと予想していたので、意外な結果である。

表12には、グループ別性別の不登校になったきっかけの選択数を示した。全体でみると、男女で大きな差が

表12 グループ別性別不登校になったきっかけの選択数

きっかけの内容		全体	小学生	小学初発	中学初発
クラス	男子	43 (45.3)	1 (7.1)	7 (23.3)	35 (68.6)
	女子	5 (27.8)	6 (20.7)	38 (44.7)	14 (14.7)
先生	男子	3 (21.4)	5 (16.7)	6 (11.8)	40 (30.3)
	女子	9 (50.0)	9 (31.0)	22 (25.9)	18 (18.9)
友だち	男子	2 (14.3)	6 (20.0)	10 (19.6)	70 (53.0)
	女子	7 (38.9)	14 (48.3)	49 (57.6)	23 (24.2)
勉強	男子	5 (35.7)	6 (20.0)	12 (23.5)	25 (18.9)
	女子	4 (22.2)	7 (24.1)	14 (16.5)	20 (21.1)
いじめ	男子	5 (35.7)	4 (13.3)	11 (21.6)	42 (31.8)
	女子	2 (11.1)	11 (37.9)	29 (34.1)	6 (6.3)
恥ずかしい体験	男子	2 (14.3)	0	4 (7.8)	13 (9.8)
	女子	2 (11.1)	5 (17.2)	6 (7.1)	14 (14.7)
身体	男子	1 (7.1)	7 (23.3)	6 (11.6)	16 (12.1)
	女子	3 (16.7)	2 (6.9)	11 (12.9)	242
人数計		242	32 (14.0)	59 (25.9)	137 (60.1)

・()内は行ごとのパーセンテージ

あったのは、「先生」、「友だち」であり、いずれも女子の選択率が高い。また、「いじめ」でも同様の傾向が見られた。反対に男子のほうが選択率が高かったものは、「クラス」、「勉強」であった。グループ別にみていくと小学生群では、「先生」、「友だち」では全体の結果と同様に女子のほうが選択率が高い。また「クラス」、「身体」も女子のほうが多く選択している。しかし「いじめ」に関しては男子のほうが選択率が高い。「勉強」も男子のほうが選択率が高く、全体の選択率よりもその差が大きくなっている。小学初発群では、「先生」、「友だち」、「いじめ」において女子の選択率が高いのは、全体の結果と一致している。この群では「身体」で男子の選択率が高いのが特徴である。また、数値的に大きな差ではないが「勉強」で女子の選択率が男子のそれを上回っているのもこの群にだけ見られる傾向である。中学初発群では、「クラス」で男子の選択率が高く、「先生」、「友だち」、「いじめ」では女子の選択率が高い。

このように、同年齢、同性の不登校児でも、不登校が始まった時期によって、不登校のきっかけとしてあげやすい内容が異なっていることが明らかになった。

3 討 論

- (1) 上記の結果から、同年齢、同性でも不登校を開始した時期によって、担任教師や友だちに期待する関わりのある方やきっかのとらえ方に差異があることが示された。同じ中学生でも、中学から不登校を始めた生徒に比べ、小学生から不登校を続けている生徒のほうが、小学生の意識に近く、彼らは不登校が始まったときの対人関係を持続したまま中学生になったような印象を受ける。ここから、不登校という経験が、実年齢において期待される発達状況や対人関係技術等に対して、何らかの影響を及ぼしている可能性も推察されるであろう。不登校期間の影響を明らかにするためには、新たな資料を収集して検討する必要がある。本研究では、予備的調査として不登校の開始時期や不登校期間の長短という要因から分析を行ったが、今後は、不登校という経験により、どのような種類の経験や学習が影響を受けるのかを、より具体的に明らかにしたい。さらに、それらの要因が、それぞれの児童生徒にとっての学校の位置づけや自己像、自己効力感等の様々な側面とどのように関連するかについても、検討したいと考えている。この影響がポジティブなものか、ネガティブなものかの判断は、慎重に行わなければならないが、不登校期間にどのような経験をしたかを検討することは、不登校児童生徒への対応や予後についての貴重な資料となりうるであろう。
- (2) 不登校により児童生徒が受ける影響を考えたとき、受け入れる側の学校のあり方も検討する必要がある。例えば、小学4年から継続的に不登校をしていた子どもが、中学3年になって学校に行こうと思ったとき、よほど不登校期間中にしっかり学習をしていない限り、学習面での遅れは当然のことながら、その間に経験すべき対人関係なども欠落したまま、中学3年の教室に戻るわけである。以前、ある研修会で、小学校から不登校をしていた子どもが、中学3年になって登校を始めたという事例報告がなされた。発表者は成功事例として発表していたようだが、その子どもは小学校4年程度の学力しかなく、しかも家庭の事情で基本的生活習慣もしっかり身につけていない状態であった。その子どもにしてみれば、学習面でも生活面でも中学3年の学校生活についていける状態ではなかったと思う。特別な手当も受けずに、他の子どもと一緒に教室にいることが、その子どもにとって、どれくらい意味があるのだろうかと考えさせられてしまった。学校での生活は、実年齢で分けられているため、その子どもだけ特別な配慮をするということは難しいのであろうが、不登校児童生徒の個人の発達という視点で考えることはできないだろうか。
- (3) 本調査から得られた結果を考察する際に、今回の調査対象となった子ども達の特殊性について考慮しておく必要がある。調査対象者となった子ども達は、不登校児ではあるが、適応指導教室に通学したり、不登校児のキャンプに参加できるエネルギーのある子ども達である。不登校児の状態像は非常に幅が広く、家から一步も出ることができない子どもから、本調査の対象者のように、学校でなければ集団生活を送ることができる子どももいる。家から出ることができず、他者との関わりもほとんど持たない不登校児であれば、また違う結果が得られたかも知れない。故に、今回の対象者は不登校児全体を代表するものではないという可能性を考慮して、結果を検討すべきであろう。

引用・参考文献

- 笠井孝久 2000 中学生の現在 村瀬嘉代子・三浦香苗・近藤邦夫・西林克彦編「教員養成のためのテキストシリーズ5 青年期の課題と支援」新曜社 p.2-7
- 笠井孝久 2000 不登校児童生徒を対象とした野外体験活動 千葉大学教育実践研究第7号 p.73-86
- 国立オリンピック記念青少年総合センター編 1998 登校拒否青少年の問題行動に対する調査研究報告書
- 宮本茂雄・弘中正美・徳丸智佐子 1992 登校拒否の態様別指導法の在り方に関する研究 平成3年度文部省科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書(研究代表者 坂本昇一, 課題番号01102046) p.5-86

注：本研究は、千葉県教育委員会学校指導部生徒指導室が主催した「問題行動に関する調査研究協力者会議」で実施したアンケート調査を筆者が再分析したものである。